

作家紹介

1 ヨーゼフ・ボイス (Joseph Beuys, 1921~1986)

1921年、ドイツのクレーフェルトで生まれたボイスは、その青年期までをオランダ国境付近の街クレーヴェにて過ごしました。第二次世界大戦中は空軍の通信兵となり、ソ連国境付近で追撃され瀕死の重傷を負いましたが、本人の語るところによると、現地のタタール人に助けられ一命をとりとめたそうです。治療のために用いられたという脂肪とフェルト、それが後の、ボイス芸術における重要な素材となったことは、よく知られたところでは。終戦後は芸術家になるべくデュッセルドルフ芸術アカデミーで学び、そして1961年に同校の教授となってからは、パレルモをはじめ多くの芸術家を輩出しました。

ボイスは生前、例えば「拡張された芸術概念」や「社会彫塑」、「人は誰もが芸術家である」といった言葉を残しています。教育者としての仕事、それから政治活動や環境問題さえも芸術上の問題として引き受けるボイスにとって、重要なのは広く公衆に語り掛け、挑発し、駆り立てることにほかなりません。最晩年の1984年に来日した際も、展覧会の開催、アクションの実践、学生との討論会、等々によって、少なからぬ足跡をこの地に残していきました。

そんなボイスがこの世を去るのは1986年のこと。以来、これまで繰り返し、この芸術家の仕事を振り返る展覧会がドイツを中心に世界各地で開かれてきました。特異な彫塑理論に基づくその造形は、たしかに捉え難いものかもしれませんが、芸術を社会のあらゆる領域へと拡張するべく生み出された作品群は、いまなおアクチュアルな問題をはらんでいます。ボイスが20世紀を生きた芸術家の中で、最も影響力を持った人物のひとりであることは間違いありません。

2 ブリンキー・パレルモ (Blinky Palermo, 1943~1977)

生まれたのは1943年、戦時下のライプツィヒ。双子の弟ミヒャエルとともにすぐに養子に出され、ペーター・ハイスターカンフとして暮らすこととなります。一家は1949年の東西ドイツ分裂に際して西側のミュンスターへと移り、そこで彼は高校生のころからジャズなどの音楽と美術に関心を寄せ、1962年にデュッセルドルフ芸術アカデミーに入学します。はじめシュルレアリスムの影響の強い絵画を描いていましたが、64年にヨーゼフ・ボイスのクラスに移って早々、マフィアでボクシングのプロモーターのフランク・"ブリンキー"・パレルモに由来するあだ名をつけられると、そこから「パレルモ」のみを取り出し、そのまま作家名にしてしまいます。学友にはゲルハルト・リヒターやイミ・クネーベルといった現代ドイツを代表する作家たちがいました。

アカデミー在籍時より、20世紀初頭の抽象絵画や、同時代のアメリカ美術の様々な動向に影響を受けながら、カンヴァスや木枠といった絵画の構成要素自体を問い直す独自の作品を手掛けるようになります。1977年にモルディブに客死するまで、既製品の布を縫い合わせた「布絵画」、建築空間にささやかに介入する壁画、小さなパネルを組み合わせた「金属絵画」などを展開しました。絵画を手段としながらも、意味の生成や感情の表出へは向かわず、むしろ絵画制作をとおして様々な物事の仕組みそのものを問おうとする、そうした繊細な作品は近年徐々に評価が高まり、ドイツ本国のみならずヨーロッパやアメリカで回顧的な展覧会が続きました。実質的な活動期間は15年にも満たないため、残された作品は限られていますが、「作家のための作家」として今なお繰り返し参照されています。